

小林久三

社会派ミステリー

真つ赤な身代金



真つ赤な身代金

一九九〇年二月一五日

初版発行

著者 小林久三

発行者 増田義和

発行所 実業之日本社

本社 東京都中央区銀座一―三―九

TEL 〇三(五六二)二〇五一(編集)

〇三(五三五)四四四一(販売)

振替 東京一―三二六―一〇四

支局 大阪市北区曾根崎二―十二―七

梅田第一ビル内

TEL 〇六(三一二)一五七三

印刷 東京研文社 製本 共文堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えます

ISBN 4-408-50158-1

© K. Kobayashi 1990

Printed in Japan

社会派ミステリー

真っ赤な身代金

小林久三

実業之日本社

真っ赤な身代金／目次

蒼ざめたウェディング・ドレス	5
替え玉投票殺人事件	35
真っ赤な身代金	67
白い雨の凶器	127
幻影法廷	159
雨が恐い……	201

装画／佐藤正

装幀／サン・プランニング

蒼ざめたウエディング・ドレス

「死んだ?……家本さんが死んだんですか」

受話器をにぎりしめたまま、西沢杏子は、そういつて、一瞬、痴呆のような眼差まなざしで宙をみつめた。受話器の奥から流れてくる声が、なにか遠い物音のような気がする。

「間違いありません。警察で、いま身許を確かめてきたところです」

電話の向こうで、三浦敏昭がいった。

杏子の耳に、その声は、さらに遠いところからきこえてくるような感じでひびいた。

「死んだって、家本さんは、どうして死んだんですか」

「焼死です」

「ショウシ?」

杏子は、おもわず声を張りあげた。

「焼死……つまり焼け死んだんです」

三浦の声が、不意に大きくなった。電圧が急にあげつて、音量がにわかに増幅したような感じだった。

「焼死したって、いつ?」

「警察の調べだと、深夜の二時過ぎだそうです。二時過ぎに家本君の部屋から火が出たらしいんですね。逃げおくれた彼は煙にやられたらしい……」

「火事になったんですか、家本さんの部屋が」

「そのようですね」

「そんな……」

「とにかく、とんでもないことになりました。大至急、中野十字病院のほうにきてもらえませんか」

「ほんとうに家本さんは死んだんですか」

「残念ながら、事実です」

〈そんな馬鹿な?〉

受話器をもった手が、わなわなとふるえ出すのがわかった。杏子は受話器をさらに強くにぎった。受話器をはなしたら最後、全身がとめどもなくふるえ出しそうな気がしたからだった。

信じられないわと、おもった。今日の午後一時から、新宿のホテルのクリスタル・ルームで、家本和夫と結婚式をあげることになっていたのだ。挙式を十一時間後にひかえた深夜、新郎となるべき家本和夫が自分の部屋で焼死してしまうとは、まるで信じられない。

「もしもし」

突然、杏子が沈黙したことに、三浦は不安を覚えたのだらう。探るような調子で、声をかけてきた。

その声で、杏子はわれに返った。

「はい」

弾かれるように返事して、杏子は、

「死んだのは間違いなく、家本さん……なんです
ね」

とたずね、自分の言葉にびっくりしたように、一瞬、あたりを見廻した。自分でも予想しない言葉が、ひよいと喉の奥から表に向かって滑り出してしまったことに驚いたのだった。おそらく気が転倒していたために、突拍子もない質問をしてしまったのかもしれない。

「どういう意味ですか」

唐突な質問に、三浦敏昭も少しあわてたようだった。

「家本さんが死んだなんて……信じられないんです」

杏子は、辛うじていった。

「わかります……その気持は。しかし、家本君が死んだのは確かです。間違いありません」

と、三浦は早口でいった。

三浦敏昭は、家本の会社の上司なのだ。郷里が家本と同じ静岡で、東京の同じ大学の先輩ということ、なにくれとなく家本の面倒をみている。仲人は、家本の大学時代の教授夫妻だったが、三浦は上司として結婚式でもスピーチを述べてくれることになっていた。昭和製鉄総務部株式課長というのが、彼の肩書きだった。

また三浦は、家本が借りていた東中野のマンション形式アパート近くに住んでおり、その関係で、いちはやく家本の部屋から火が出たことを知って現場にかけつけ、焼死体の身許を確認し、すぐに電話で知らせてきてくれたのだろう。

「いずれにしろ、できるだけ早く病院のほうにきて

ください。できたらご両親と一緒に……」

そこで電話は切れた。

沈黙した受話器をしばらくみつめてから、杏子は力なくフックにもどした。壁の時計をみると、午前四時をちよつと過ぎている。

なにか急いで、考えなければならぬことが、たくさんあるような気がした。が、なにひとつ考えられなかった。

頭のなかが真空になったようで、思考力が完全に麻痺^{まひ}している。電話で叩き起こされたときの半睡半醒の状態からぬけきっているけれども、その状態以上に頭がぼんやりしている。

〈家本さんが死んだ……焼死したんだわ〉

そんな声が、一定のリズムを刻^{きざ}んで、耳もとにきこえてくる。

杏子は自失したように、その声に耳を傾けてい

た。いまの電話は、夢のなかの出来事だったとはおもえない。いたずらだったとは考えられない。現実を起こったことを、三浦課長は伝えてきたのだ。

「どうすればいいの……わたし」

杏子は、ぽつりと独り言をいった。

まずなによりも、いまの電話の内容を両親に知らせなければならぬ。そして、両親とともに中野の病院にかけつけ、焼死体の身許を確認することが先決だ。

そのことは、わかっていた。わかってはいるけれども、体が動かなかった。体が金縛りにあったように身動きできない。

「どうしたの……こんな夜中に」

背後から、声がかかったのは、そのときだった。

母親の文江の声だった。

杏子は電話台のある廊下の隅で、ふり返った。寝

巻き姿の文江は、怪訝（けげん）そうに杏子を眺めて、改めて声をかけた。

「電話があつたの？」

杏子は無言でうなずいた。

「だれから？」

「……………」

「どうしたの、なにかあつたの」

「死んだわ……」

虚ろな声で、杏子が答えた。「家本さんが、さつ

き焼死したそうよ」

「なにいつてるの」

寝呆けまなこの文江は、一笑にふした。

「なにか悪い夢でもみたんじゃないの」

「ほんとうよ」

突き刺すような調子でいったとき、杏子は激しい

めまいのようなものに襲われた。胸がむかついた。

ちように船酔いに似た感覚だった。

「ほんとうって……まさか」

そう呟^{つぶや}いて、その場に凍りついたように立ちすくむ文江に向かって、杏子は、

「パパも起こして……」

けだるそうにいうと、覚つかない足取りで歩み寄った。めまいはさらに激しくなつて、彼女の視界のなかの、あらゆるものが形を歪^{ゆが}めて、ほんやりした姿でみえてきた。

そんななかで、杏子は、家本はほんとうに死んだのだろうか、自分の胸に問いつづけていた。さつき電話で問いかけた言葉が、奇妙なほど鮮かに甦^{よみが}ったのだ。

家本は、なぜ挙式のその日に焼死したのかしら。焼死したのは、ほんとうに家本なのだろうか。

2

その喫茶店は、ビルの地下にあった。

杏子は、喫茶店の片隅で、三浦課長のくるのを待ちながら、ひとりでコーヒーを飲んでいた。会社のひける時間のせいか、店内は若いカップルで満員だった。

杏子は、カップルの姿を目で追いながら、一種のひけめを味わっていた。その感情の底には、いいよりのない惨めさと劣等感のようなものが沈んでいる。

挙式を目前にして、結婚相手に死なれた花嫁というものは悲惨だった。もちろん結婚式はとりやめになる。式場はキャンセルされた。ハワイへの五泊七日の新婚旅行も中止された。挙式に出席するため

に、地方から上京してきた親類や友人たちも、そのまま引きあげていく。

この日のためにつくられたウェディング・ドレスも、宙に浮いた。新婚旅行から帰ったあと、二人が入居することになっていた阿佐ヶ谷のマンションの一室も、無人のまま放置された。二DKのその部屋を飾った新調の家具も、一度も使われることなく、そのままになっている。

影響は、それだけにとどまらなかった。

なによりも、杏子の心に癒^いしがたい傷をあたえた。二年間交際したすえに、人生の伴侶ときめた相手に、突然、死なれたというショックによる傷は大きいといえた。

その傷は、時間の経過とともに、深さと痛みを増していくかのようにだった。燃えさかる炎のような感覚にえぐられて、彼女はなんと呻^{うめ}き声をあげたかし

れない。この痛みは、一生消えることはないのではないかと、彼女はしばしば考えたものだった。

それと同時に、杏子を傷つけたのは、周囲の目だった。白い花嫁衣裳から一転して黒い喪服を着ることになった彼女に対し、周囲のものは、だれかれとなく、同情と哀れみの目を向ける。そして、口ぐちに、

「気を落とすことはないわ。人生は、まだこれから長いよ」

とか、

「いつかまた、いいひとがみつかるさ」

となぐさめや励ましの言葉をかけてくれるが、どこかこちらを好奇の目で眺めているかのようにおもえる。そういった目に、彼女は自分の裸をさらけ出しているような恥かしさと屈辱感を覚えて、反発した。

家本和夫が焼死したのは、事実だった。

警察の調べによると、家本は、その夜、泥酔したままベッドに入っただけ。独身最後の夜というところで、彼は会社の同僚と新宿でたまたま酒を飲んで、午前一時過ぎにタクシーでマンションの三階にある自分の部屋にもどり、着換えもせず床についてた。

ベッドで、家本はさらに水割りを飲んだうえに、煙草を吸ったようだ。前後不覚になって眠りに落ちたところを、消し忘れた煙草の火がシーツに燃え移った。

火に気づいたときに、家本は化粧の掛け布団などから発する有害ガスを吸って意識不明に陥ってしまったらしい。消防車がかけつけたときは、すでに火は室内を舐めつくして、手の打ちようがなかったという。室内から助けをもとめる人間の影はなかつた。

つた。

隣室への類焼を食い止め、ようやく鎮火したあとに消防署員が室内にとびこんだところ、ベッドには無惨な黒焦げ死体が横たわっていた。

杏子は、病院に運ばれた家本の遺体をみたとき、生前の彼とはあまりにも変り果てた姿に声も出なかった。それは、人体標本のように、骨格と骨組みだけを残した死体だった。皮膚や肉は、ほとんど焼け爛れてしまっている。

その遺体と対面しても、杏子はなぜか家本が死んだという実感が湧かなかった。あまりに突発的な死のうえに、死体が肉体感にとぼしかったせいかもしれない。言葉を失ったのは、人間の死体というものは、ここまで無惨に変わりうるものかということに衝撃を受けたためだった。

だが、遺体は、間違いなく家本和夫だった。残さ

れた歯型をとり、彼が生前に虫歯の治療に通っていた歯科医のカルテと照合したところ、ぴたりと一致したのである。

また遺体には、外傷らしいものはなかった。火元は彼のベッドであり、ベッドのサイドテーブルにはブレンダーの瓶とミネラル・ウォーターの瓶、それと灰皿が残されていて、放火による不審火とは考えられない。

要するに失火による焼死ということで、すべてに終止符が打たれた。家本の遺骨は、結婚式に出席するため、上京した彼の両親に抱かれて、郷里の静岡に運ばれ、先祖代々の墓のある海を見降ろす墓地に埋められた。

杏子はしかし、どうしても家本が死んだとはおもえなかった。彼は生きていて、ひょっこりと目の前に現われ、改めて彼と結婚式をあげるようになるか

もしれない、そんな予感に、しばしば襲われた。

それは未練というものだった。

日がたつにつれ、その予感は消え、代りに、いいようなない苦しさが胸に詰まり、哀しみが蓋をした。

毎晩のように家本の夢をみた。

夢のなかに現われる彼は、かならず火につつまれていた。燃えさかる炎のなかで、彼はなにかを訴えるような目で、じつとこちらをみつめている。みつめるだけで、なにもしゃべろうとしない。

〈家本の焼死は、本人の不注意によるものだったのかしら〉

夢のなかに現われる、彼の訴えるような目に触発されて、杏子はしだいにそのように考えるようになった。焼死の原因は、ほんとうに泥酔した彼の寝煙草によるものだろうか。

家本と交際しはじめて二年になるが、性格的には生真面目そのものだった。一緒によく酒を飲んだけれども、適量を心得ていて、前後不覚になるほど酔ったことは一度もなかったとおもう。結婚を機に退職するまで、同じ総務部にいて彼とは毎日のように顔を合わせてきたのだから、この観察に間違いはない。男だけの酒の席だからといって、羽目はずすようなタイプではない。

ただ、独身最後の夜ということで、職場の同僚たちにかかわれて、無理に飲まされたということも考えられる。

焼死する前、家本はだれと、どの程度、酒を飲んだのか。そのことを知りたいと、杏子はおもった。

もうひとつ、家本が焼死したことを、いちはやく電話で知らせてきた三浦課長のことが気になっていた。電話を受けたときは、動転のあまり、うっかり

きき逃^{のが}したが、三浦課長は、家本和夫が焼死したことは間違いないと断定した。けれど、発見された死体は、性別もわからないほどに黒焦げになっていたのである。にもかかわらず三浦課長は、その焼死体が家本であることを、確信しているようにおもわれた。三浦課長は、なぜ、そのような確信をもつていたのか。

また、三浦課長は、家本の部屋から出火した直後に、彼のアパートにかけつけ、そのあと病院で焼死体の身許確認を行っている。自宅から彼のアパートまで、歩いて十五分ほどの距離にあるとはいえ、課長の行動は機敏すぎて無駄がないといえる。悪くカングれば、課長はまるで家本が焼死することを予見していたといえないこともない。

そういった疑問を、それとなく問い質すために、杏子は、焼死事件があつてから十日目、四ツ谷にあ

る昭和製鉄本社近くの喫茶店「スングリー」に、勤務を終えた三浦課長を電話で呼び出したのだった。

コーヒーを飲み終わったところに、ようやく三浦課長が姿を現わした。めざとく杏子の姿をみつけた課長は、大股で彼女の席に歩み寄ってきた。約束の六時十五分より、十分ほど遅れていた。

「すまん。出ようとしたところに部長に呼びとめられたもんで」

三浦課長は弁解がましくいい、杏子と向かい合った椅子に腰を降ろすと、

「大変だったね、君も。気分的に、少しは落着いた？」

と、眼鏡を眉間みけんのところで軽く押えながら、彼女の顔をのぞきこむようにしていった。

「はい……」

胸にあるものとは逆のことをいって、杏子は頭の

なかで、質問事項を組み立てはじめた。

三浦は、杏子が退職したあとの職場の様子ようすをしゃべったあと、

「ところで、ぼくに話があるというのは？」

と、眼鏡の奥の目を光らせながらいった。

「変なことをうかがうようですが、課長は、あの晩、家本さんがあんな事件を起こすことを、ご存じだったのではないでしょうか」

杏子は、引き金を引くような調子でたずねた。

3

「ぼくが、家本君が焼死することを知っていた？……そんな馬鹿な」

運ばれてきたコーヒーを口元に運びながら、三浦課長は苦笑するように頬を歪めた。だが、眼鏡の奥